

学校を
創る

新米校長の一年間

～学校の強みを学校経営に生かす取組～

松戸市立旭町中学校長

ごとう
後藤

ただゆき
忠幸



1 はじめに

「教職員に対して、はじめにどんな話をするか…」、本校に着任が決まったとき、最初に悩んだことだった。新任校長として最初に発する言葉は、自身の学校経営の基軸になると思ったからである。話す内容はとめどなく頭に浮かぶのだが、第一声の言葉となると一つに決められない。考えに考えた末、職員には「チームの重要性」を訴えることとした。「一人で出来ることには限界があるが、チームでできることは無限だ」、「物事の良い点を生かし、個々の貢献をかけ算していこう」と熱く語った。そしてこれを基軸とした新米校長の一年間は矢のように過ぎていった。

2 本校の強み

「あんな学校には子供を通わせたくない。」本校は、入学予定者の半数近くが学校選択制で近隣中学校を選んだという困難な時代を経験している。そんな状態を立て直したのは、保護者・地域との連携であった。本校の学区は古くから新田開発が進み、地域の繋がりが強い。さらに福祉施設などが多く存在するため、地域交流やボランティア活動の前面に生徒を出し、成果をあげた。この伝統は今も発展した形で継承されており、本校の最大の特徴となっている。

また、ひとつの交差点を中心にして、旭町小学校、本校、松戸馬橋高校が隣接しており、小・中・高等学校の連携を進めやすいという利点がある。さらに、ほとんどの

生徒が隣の小学校から入学する一小一中の状態のため、中一ギャップが比較的起こりにくい。生徒数 300 名未満という松戸市の中では小規模校という点も大きな特徴である。



地域のリハビリ施設にて

何事にも良い面と悪い面が存在する。しかし、学校経営においては、ないものねだりをせず、不満を語らず、良い点を生かし、希望を語らなければ前進はできない。本校をとりまく諸条件を強みと捉え、次のような学校経営に力を注いだ。

3 強みを生かす取組

(1) 目標の周知

機動力がある、共通理解を図りやすいなど、「小さな職員室」には良い点がある。これを最大限に生かすために、次の点に力を入れた。

①校長のビジョンとゴールイメージを、明確にわかりやすく教職員に提示することを心掛けた。若手にも理解しやすいように、抽象的な理念や実態に即さない目標

とならないように常に「表現力」を意識した。特に、肝心な内容については、校長通信を毎週発行し、文字として残した。

- ②校長の示したビジョンと目標は、教職員一人一人が自分の言葉に置き換えて目標申告に記載するよう指示し、チーム一丸の意識の向上に努めた。
- ③校内巡視が容易にできるため、管理職の授業巡視を頻繁に実施した。さらに教職員との面談に回数と時間を割き、コミュニケーションを深めた。
- ④学校が目指す教育目標と取組を保護者・地域と共有するため、グランドデザインを作成した。また、学校だよりとホームページの刷新・充実に努め、情報をわかりやすく具体的に根気強く発信している。

(2)人的・物的資源の確保とその活用

伝統となっている地域行事への参加とボランティア活動は継続しつつ、地域との距離が近いことを生かして、新たに学校外の資源を利用することに力を入れた。

- ①隣の高校から高校生を講師に招き、年4回の定期試験前に学習会を実施した。高校生に任せることには不安もあったが、多くの高校生が立候補し、予想以上に積極的な取組が見られた。教えられる方と教える方の双方に満足感が得られる素晴らしい時間となった。



高校生による学習会

- ②部活動の交流を軸に、小学校と高等学校との連携を強化した。

- ③市の学習支援員制度「まなび助っ人」を活用し、放課後数学教室を導入した。講師は地域の大学生を活用した。

- ④数学の家庭学習「マイマス」を実施し、家庭学習の習慣化を図った。数学担当者の負担を軽減するために、学校体制でフォローできるよう時間割を編成するとともに、学習支援員もこれに活用した。

- ⑤教科主義に陥らないよう、校内授業研究はICT教育とインクルーシブ教育を軸に教科を越えた研修とした。

(3)人材育成、働き方改革

- ①若手教員の育成は待ったなしの状態であるため、経験5年までの教員に特化した研修会に力を注いだ。
- ②学校には変化を恐れる文化があり、前進を阻むことがある。慣習に縛られることなく、現行の教育活動や組織を見直すよう呼びかけた。特に職員会議の議題は、ビルド&ビルドから脱却する視点で提案、協議を、行なった。
- ③放課後の電話対応について、学校だよりや保護者会で理解を図り、「生徒の下校1時間経過後は、外部からの電話に対応しない」という基準を設けた。

4 おわりに

校長としての責任はあまりにも大きく、緊張感の連続だった。しかし、本校の教職員は、第一声の「チームの重要性」をよく理解してくれた。おかげで職員室のまとまりの良さが私の自慢となった。生徒の笑顔をつくるには、教職員の笑顔が不可欠であることを改めて実感する一年となった。二年目も、「生徒にとって最良の教育活動をチーム一丸で取り組む」という基軸はぶれることなく、教職員と生徒の笑顔があふれる学校を築くために全力を尽くしたい。そのために、私自身も「言動一致」で範を示す覚悟である。



「那古っ子の育成」を目指して ～学校教育目標具現化への取組～

館山市立那古小学校教頭 よしの かおる
吉野 薫



1 はじめに

中学校で長く勤めてきた私は昨年度、教頭として初めて小学校で勤務するようになった。

本学区はかつて那古寺を中心に門前町として発展した。商業や農業も盛んで、自然も豊かな地区である。今年度本校児童は233名であり、普通学級が9学級、特別支援学級4学級である。本校の職員は半数が50代である。数年前までは、日々の学習に困難を要していたが、ベテランの職員が若手の指導を上手に行ってくれているおかげで、現在は落ち着いた環境で日々の学校生活を送っている。

私自身が中学校の現場でこれまで過ごし、小学校の教育現場に入ったのも初めてであった。そうした本校の実態を踏まえ、新任教頭として学校教育目標の具現化のためにどのように取り組むべきなのか毎日が暗中模索の日々であった。そのなかで、昨年度私が取り組んできたことを述べたいと思う。

2 めざす子供の姿

(1)根気強く考える子(確かな学力)

本校では、知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の育成を図るべく、朝自習の時間をフレッシュタイムとし、算数や国語のドリル学習、朝読書に取り組んでいる。また、学力向上推進委員会が中心となり、学校独自の検定試験を定期的に実施している。毎日の授業では、学習規律の確立や学

習成立率の向上が図れるように2名の学習支援員を効果的に配置している。その取り組みにおいて、私は教頭としてそれぞれに担当者を割り当て、学校全体が組織として動けるように検証し、協議を図ってきた。

(2)仲良く助け合える子(豊かな心)

豊かな心の育成を目指して、本校は異年齢交流として、全校縦割りグループで、定期的にランチタイムと昼休みの縦割りグループ遊びを行っている。また、遠足などの行事でも、この縦割りグループ単位の活動を取り入れて、これらの活動を通して、グループの仲間意識や、上学年の子供のリーダーとしての責任感を育てている。その取り組みにおいて、どの行事がどの時期に最もふさわしいのか、担当者や全職員と連絡を取り合い効果的に行えるよう心がけてきた。また、写真記録をとり、学校のホームページ上のブログや、学校だよりに掲載することにより、児童や職員の意識高揚につながるように心がけた。

(3)強い体を持つ子(健やかな体)

「体力・運動能力の向上」については、自分なりの目標を持たせて運動させる取組で、自主的に校庭を走る取組やマラソン大会を行っている。教頭として取り組んだことは、校庭の整地とマラソン大会時の保護者の協力依頼である。本校の校庭は水はけが悪く暗渠もなく、雨が降ってしまうと数日は校庭が使えなくなってしまう。子供たちができるだけ校庭が使えるように、水たまりができそうな場所をあらかじめ記録し

ておき、校庭で行われる行事の前には、各機関に依頼をして土砂を計画的に入れるようにした。マラソン大会では、子供の安全の確保や、学校行事に保護者が関わりを持っていただけることを目指し、マラソンコース上の安全員を保護者に依頼をし、効果的な人数の調整や配置を行った。

3 配慮を要する児童への支援

様々な特性を持った児童がおり、きめ細かい指導が必要になってきている。そのため、全職員への情報共有を図り、児童への指導をより効率よく行うため生徒指導の会を定期的に行い指導の充実を図っている。また、地区不登校等拠点校配置のスクールソーシャルワーカーや、学区中学校のスクールカウンセラーを活用し、教師や保護者では語れない児童の内面をサポートするため、教頭として学級担任と各家庭や保護者とのパイプ役を担い、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーとの連絡を密に取り、学級担任の負担軽減や、問題解決に奔走した。

4 勤務時間縮減に向けての取組

勤務時間縮減に向けては、職員の意識を高めるため、5月に2週間退勤時刻を調査し、結果について打ち合わせで周知を図った。これにより、自分の勤務の様子をふり返り、仕事の効率化や時間の使い方などについて、全職員の意識を高めることをねらった。10月以降は1月単位で集計を行った。また、週に一度退勤時間を意識するリフレッシュデーを設定した。さらに今後は、行事の精選や校務分掌、児童活動の見直しなども関連させて、業務の効率化を図り、勤務時間縮減のための具体的方策を協議、提案することも考えている。

年度末、年度初めの事務処理を行っている時期は、大幅な勤務時間縮減はなかなか

難しいところだが、今後も引き続き取り組んでいく。

5 防災教育の取組

平成29年度に本校は、「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業」に取り組んだ。地区合同訓練と引き渡し訓練では、本校の児童、隣接の幼稚園児と近隣地域住民の方々も交え、地震・大津波警報が発令された場合を想定して行った。幼稚園児、児童たちは、避難指示が解除されるまで、4階特別教室などで待機をし、近隣地域住民の方々は3階の音楽室に避難をし、避難所で自分たちがどこに避難するかを確認することができた。教頭として、避難訓練の企画や運営を行うにあたり、近隣地域住民の方々への連絡や調整のため各地区の班長さんや地区長さんの家に配布物を届けたり、防災担当者会議を行うにあたり地区の役員の方々や関連機関担当者との連絡を数度に渡り行った。

この防災教育の取組は、初任教頭として1年間を通じてかなりの負担ではあったが、各種連絡を通じて住民とより親密に会話ができるようになった。また、児童と地域住民が訓練を通じて普段から顔を合わせることで、お互いに信頼や安心感が得られたことが大きな喜びとなった。

6 おわりに

本校の学校教育目標は「『那古っ子』の育成」である。仲良く助け合える子、五感で感じる子、強い体を持つ子、根気強く考える子の育成を目指している。学校教育目標の具現化のため、校長の指導の下、教職員と地域の方々と協力をして、今後もよりよい学校づくりに取り組んでいきたい。

学校を動かす

主幹教諭としての1年

習志野市立第三中学校主幹教諭

みつはし
三橋
なおゆき
直行



1 はじめに

主幹教諭としての勤務が1年を経過した。昨年度の校務分掌は、教務主任、研究主任の兼務、校外では市教研理事、教科指導員などを担当していた。授業は技術・家庭科を担当しているので全学年の授業、部活動の顧問など毎日忙しい日々を送っていた。それでも校長、教頭をはじめ、先生方の協力や生徒の頑張りに力をもらいながら充実した毎日を過ごすことができた。

2 「新たな学びに関する教員の資質・能力向上のためのプロジェクト」の推進

平成29年度から、最も力を入れているのが研究指定を受けている「新たな学びに関する教員の資質・能力向上のためのプロジェクト」の推進である。新学習指導要領が公布され、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている。これまで取り組んできた「三中学びスタイル」（授業規律や授業スタイルについての学校としての共通取組）を基にしながら生徒が主体的に活動する場面を増やした。すると、生徒の発表や意見交換で授業が進み、最後のまとめでは様々な考え方が収束し、学習課題に対する理解が深まっていく。このような授業を探究して試行錯誤の毎日である。若い先生方を中心に授業研究を行い、全体講師である横浜国立大学名誉教授高木展郎先生の指導を受けている。平成30年11月5日に公開研究会を計画している。これまでの実践を基にさらに研究を進め、2年間の成果が発表できればと考えている。

3 全職員にカリキュラム・マネジメントの視点を

平成29年度3学期の研修では「学校のグランドデザイン」を全職員で考え作成した。そこから「学年のグランドデザイン」、「教科のグランドデザイン」と進め、平成30年度を迎える。先生方一人一人が自分の学年、教科等だけでなく教育活動全体を俯瞰で見える目を持つこと、教科横断的な指導感を持つことがカリキュラム・マネジメントには必要である。理念や情報を全職員で共有し、教育活動の評価、改善を進めていくことにより「チーム三中」として、組織が機能する学校としての力を高めていくとともに、地域や専門機関と連携、分担して効果的に動く学校体制を作り上げていくことを推進していきたい。

4 おわりに ～主幹教諭として～

主幹教諭として大切なことは、常に学校全体の様子を把握していることと考える。校長、教頭との連携、学年間の連絡・調整、各分掌の担当者への早めの声掛け、学校の環境整備、先生方の勤務の様子や健康状態の把握など、自分は常に4つの時間を意識している。それは「現在」、「一週間後」、「二～三か月先」、「一年後の今日」である。現在の状況から気づいた課題や改善点はすぐに修正して次年度に生かす、先の見通しを持って計画的に進めていく、こうした取組を進めていくことで日々の教育活動がスムーズに効果的に展開でき、学校の力を向上させることにつながると感じている。今後も校長、教頭の指導を受けながらも主体的に職務に邁進していきたい。

児童理解に努める

～私が行ってきた「ほめだし教育」～

富津市立青堀小学校教諭

あんざい ゆ み こ
安西脩倫子



教員となって2年目を迎え、気持ちも新たに子供たちの前に立っている。昨年度の初任者研修で学んだことは、子供に寄り添い、共に成長していくことだ。私にできることは子供を理解してあげることと強く感じた。理解するためには、子供に共感をすることと考えている。

B研修(年間指導計画に基づく研修)では、「だめだし教育」から「ほめだし教育」へという本校校長の教育方針に感銘を受けた。早速、日々の教育実践に生かすために児童理解に努めた。毎日、一人一回は必ずほめることにした。それができない時には、連絡帳にメッセージを書いた。会話を通じてどんなことに興味を持っているのか、どんなことに困難さを抱えているのかを知る良い機会になった。どんなに小さなことでも、「ほめる」ことを続けた。ほめられることで、自己肯定感も高まり、自分に自信を持つことができるようになった子供もいる。私自身も、そのような子供たちと毎日接する中で、いろいろなことに挑戦し、できることが増えていった。子供たちの成長を見ることで、自分もほめられている気分になった。

今年は、授業の中でも、「ほめだし教育」を実践していきたい。そのためにも指導力を高めていく。子供の学力を向上させ、さらなる自信をつけさせたい。いつでも子供に寄り添って、「ほめて」成長させられるような指導をしていきたい。

初任者研修を通して

県立柏南高等学校教諭

ながお あやみ
長尾 彩美



1,000人を超える全校生徒を前に圧倒されながら自己紹介をした日から早1年が経った。臨任講師をしていた時とは校種の異なる学校で採用になった昨年度は、毎日が慣れないことの連続で日々奮闘した。指導の仕方で悩むこともあったが、保健体育科をはじめ、周りの先生方にたくさん助けていただき、無事に2年目を迎えることができた。

初任者研修では、毎回同期と情報交換をし、悩みを共有する中で「生徒が感じる悩み」「教員が生徒に対して感じる思い」は皆同じであると気が付いた。また、研修の中でも生徒に寄り添い、話を「聴く」ことの重要性を学んだ。「〇〇先生にはなんでも話せる!」を目標にした対話の仕方についての研修は特に印象に残っている。さらに、教師とは「教える」だけでなく「導く」ことの大切さも学んだ。本校は進学する生徒が多い学校だが、私は保健の授業で「保健は受験科目ではない。しかしこの先、生きていく上で大切な知識の1つである。」と常に伝えている。教科書に書いてあることをただ「教える」だけでなく、正しい知識を伝え、正しい情報をもとに正しい選択ができる大人へと「導く」ために教材研究や情報収集と授業づくりを欠かさずに行っていきたい。

今年度から新たに担任として学級経営も始まるが、生徒に寄り添いながら共にたくさんのことを学び、共に成長していけるように頑張りたい。



私が大切にしていること

流山市立江戸川台小学校教諭 あかさわ 赤澤 ゆう 由美



1 はじめに

「主役は子供」その思いを日々感じながら教育活動に励み、気が付けばこれまでにたくさんの子供たちと関わり合ってきた。そして今、目の前にいる一人一人の児童と正面から向き合うことができるのも、これまでに会った彼らにたくさんのことを教えられ、私自身の中で、「次はこうしたい」という思いや信念ができたからであると考えている。

毎日があっという間に過ぎていく慌ただしい日々をここで一度立ち止まり、日々の授業を創るうえで心掛けていること、大切にしていることを自分自身も一度整理してみたいと思う。

2 私が大切にしていること

(1)子供たちとの約束を守る

年度当初、私は毎年子供たちに伝えることがある。

「人や自分の心や体を傷つけてはならない。全力でやるときは、全力でやる。この二つを守れなかったときは、私は本気で叱ります。」と。

小学校1年生でも6年生でも、4月の学級開き最初の出会いの時間に、そのことを伝えるようにしている。そして、その信念を私自身が崩さないように意識しながら日々の指導に当たっている。また、最初の保護者会でも、保護者の方にそのことを伝

え、子供たちのために学校と家庭が連携していくようお願いする。

教育には信頼関係が何よりも大切であると考えている。教師のことを信頼できなければ、指導してもその内容が心に浸透するはずもない。また、ただやみくもに叱ったり、ましてや怒ったりしても、子供の心は離れていくばかりである。教師が子供たちに本気でぶつかり、どのような学級を作っていきたいかを皆で話し合えば、子供もそれにこたえようとする。

一方で、子供はまだ成長段階であり、思うようにいかないことだらけである。気持ちがぶれることも多々ある。思いとは反対の行動をしてしまうこともある。そのようなときに毅然として正しく導くこともまた、私たち教師の役目であるので、教師は常に冷静さも持ち合わせておかねばならない。

日々変わる状況を的確に判断して、子供たちがどのようなサインを送っているのか、鋭いアンテナを持ち続けていく、敏感な教師でありたいと思っている。

(2)基礎・基本を大切にする

また、本校は10年間の算数の研究から、新たに研究教科が国語になった。昨年度、初めての研究主任となり、初めてのことで戸惑うことも多く、周りの先生方にもたくさん助けていただいた。また、総合教育センターの新任研究主任研修にも参加

させていただき、たくさんのことを学ばせていただいた。本校の国語科研究1年目としての研究成果として得たことは、基礎的・基本的なことをていねいに身に付けさせることである。特に本校の児童の実態から浮かび上がったことは、少人数では意見を言えるが、学級全体の前で話をすることに抵抗を持つ児童が多くいること、語彙力が少ないことである。そこで本校の研究主題を

「自ら考え、かかわり合う学習指導のあり方～言語活動の充実を通して～」

とし、研究仮説を

「言葉を大切にし、伝え合う場を設定すれば、主体的に学習する子が育つだろう」

とした。

「言葉を大切にする」ということを達成させるために、まずは語句や意味をしっかりと学習させる一人読みプリントを導入した。教科書本文の穴埋め形式で、どの子も確実に本文の意味が分かるようにするためのものである。次に「伝え合う場の設定」として、少人数グループでの話し合いを持たせて自分の意見に自信を持ち、場に慣れることで、全体の場でも自信をもって発表できるようにする。また、伝え合いには聞く側の姿勢も重要である。そこで、「話し方・聞き方」の基準を明確にし、確実にその学年で身に付けさせることを徹底した。

他にも、学習に臨むための態度や姿勢、学習用具、学習中の返事や挨拶など、基本的なことを確認する年となった。

以上のように、目新しい方法はあまりないが、若年層の教員が増えた本校にとって、基本的なことを今一度教員間で確認し、指導を統一する良い機会となった。語彙力を増やす方法など、まだ改善点はたくさんあるので、引き続き校内研究を進めていきたいと考える。

(3)個性を引き出す

学級経営をする上で3つ目に大切にしていることは、子供たちに、「失敗を恐れず、何事にもトライする」大切さを伝えることである。そのためには、例えば掃除リーダーや生活班の班長など、まずは小さなグループの中でリーダーを作り、小さな成功体験をたくさん積ませる。そして、リーダーとなった子供をできるだけ褒める。失敗をしたらなぜうまくいかなかったのか、一緒に考え、決して人前では叱らない。また、そのリーダーを支えていた周囲の子供のことも褒める。自分なりに協力していた子供の小さな行いも見逃さず、自分の役割を頑張ったことをねぎらいたい。時間や手間はかかるが、その一つ一つが次へのチャレンジ精神を持たせる一歩だと思う。自分ではできないと思っていたことができるようになったという達成感を持たせることや、自分の新たな一面を発見させる楽しさや喜びも、教師にはある。

子供たちの伸びる可能性は無限にある。その芽を教師が引き出すことこそ、私たちの仕事そのものだと思う。子供たちが安心して自分の能力を発揮することができるのも、安心感のある学級、自分の意見を素直に言える学級の雰囲気あってこそだろう。

3 おわりに

以上、3つの私なりの信念を持ち続け、日々自分のできることを精一杯行っていきたい。また、子供たち一人一人の能力を引き出し、輝くことができるよう、これからも教職員、保護者の方々、地域の方々と協力して子供たちを育てていきたい。